

内科・糖尿病内科 担当医師 井口昭久教授の随筆が掲載されました。

(名大医学部学友時報 第876号 2023年1月22日発行)

人生
山あり谷あり

第70回「特別養護老人ホームの偽患者」

名古屋大学名誉教授
愛知淑徳大学教授

いぐち
井口

あきひさ
昭久

川の畔に建っている特別養護老人ホームの理事になって20年になる。

一年に2回理事会があって毎回欠かさずに参加してきた。

会議は施設の3階で行なわれる予定であった。

玄関を入れて受付を済ませてエレベーターまで200メートルほどの距離がある。

通路脇に広い空間があってデイサービスに通っている老人たちがいた。

職員が通路から入所者を見渡せる配置になっている。

長い机の前の椅子に20名ほどが腰を下ろしていた。

患者たちは全員が頭を垂れて椅子に座っていた。

豪華なソファが目についた。

廊下に面して置かれており、老人たちのいる机の横にあって、人の通過する廊下から4メートルほどの位置にあった。

会議室へ入るには早すぎると思ったので、空いていたソファに腰を下ろして患者たちを眺めることにした。

施設の理事長が目の前の廊下を通った。周囲を見回しながら悠然と歩いて行った。

スーツを着た品のいい老人は私一人で、老人施設の患者たちの中では異色性を醸し出しているはずであり、私に気が付く筈だと思っていた。

しかし部屋全体を見回した理事長の視線は私を横切ったが「イグチ先生」だと気が付かなかった。

以前から知っている男性の職員が食器の後片付けをしながらおやつを配っていた。私の座っている隣の机に近寄ってきて雑巾がけをした。

私は挨拶のタイミングを計っていたが彼の流れ作業に節目は

無く、挨拶の機会はないまま私の傍から離れていった。

会議に参加する予定の顔馴染みの委員が通過した。

周辺を見ながら歩いていたので私も視界に入っていた筈であるが、「あ！！イグチ先生」とは言わなかった。

10分間、腰かけていたが、私に気づく委員も職員もいなかった。

私の勤務している大学の構内であればきっと私に気がつくはずだ。

そう思って、思い当たった。

私は老人施設の患者風景に溶け込んでいて何の違和感もなかったのだ。

私は老人施設の患者に相応しい老人であったのだ。

